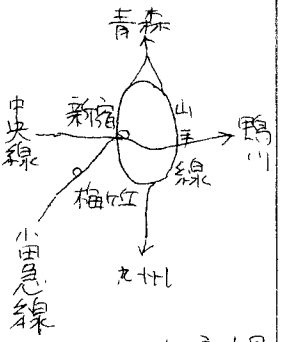
もう第23号　2009年3月25日発行　業界クッシの情報紙

瘤報籠屋新聞

瘤報籠屋新聞社
鴨川市代（だい）六二三
〇四一-七〇九二-九九一二

ご開帳、「ナオの南風（ハエ）語り」

日時　四月十日（土）
会場　ギャラリー・ガラ
（東京・梅が丘）



<わかりやすい案内図>

「これが最後か、カゴ屋の展示」の呼びこみで、前回の個展案内を発送したが、失敗した。それに懲りて、今回は同じ轍の手は使わない。「お出でなさい、おもしろいよ。さあさあ、奥に詰めて、詰めて、本戸銭はいらないんだから」と、いたって物腰は柔らかい。

待望久し（くもないか？）、南の島のお話、それも、とっておきのお話を、出し惜しみすることなく、全部さらけ出しちまおう。わたし（〝社主〟）ひとりが抱えこんでいても、苦かされる道はない。墓場への手みやげは、どれだけ多くの人が島のことに関心を示してくれるかである。

みなさん、持てるだけの話を持ち帰っていただきたい。その話をおもしろ美味しく調理して、こんどは周辺の方にお裾分け願いたい。それが何の養分になるかは分らないが、悪徳の集れ流しにはならないような気がする。

開塾は四月十日（土）午後三時。
会場は小田急線の梅が丘駅近く。

「知ることと同じように、疑うことは私には負担がよい」　ダニテ「地獄篇」

ギャラリー・ガラである。駅の南口から「歩いて一分」と、案内ハガキに印刷されているが、どうも不動産屋のキャッチコピーのよう。ここでは「二分」としておこう。とにかく近い。

題目は「贈与論」。エッ、それなあに、と目を丸くされる方は、おそれることはない。日ごろ耳にしたこともないコトバにはすぐに飛びつかないこと。でも、これは何てこともないこと。お歳暮やお中元で贈答品に触れる人は多いが、贈り物が人間の繋がりにとって、どんな意味があるかを問う機会は少ない。今回はその話をとりあげる。ここでいう島とは、鹿児島県鹿児島郡十島村（としまむら）平島（ひらしま）である。「島」が四つ並んだ。私の旧居住地である。

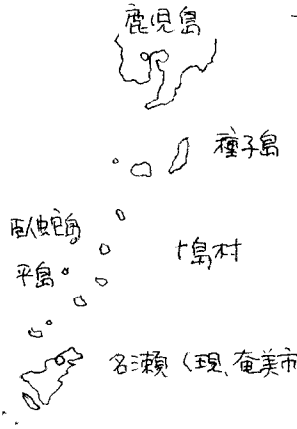
△　△　△

ヨーロッパ・アメリカのお化けたち

ある未明、わたしは夜の魚寝をから帰ってき、裏庭で魚捌きをしていた。突然、目の前に大根が二本、笑ぶ越しに転んできました。畑から引き抜かれたばかりとゆえて、泥が黒々とついていました。これが物語りの始まりです。投擲の選手の姿は見えませんでした。大根は口がきけないので何も語りはしなかったのですが、その代りなのか、こわい顔をしたお化けが後ろについてきていました。四人か五人か、まだ空もえん分に明けきらないゆえ、皆は名乗るのでした。親分格と人は初めに口上をきりました。

「せっこやは、おフランスからやってきたモースでごぎる」

次々にサーリニズだとか、ゴドリエだとか、耳慣れない名前を言います。女のお化けもいました。ナタリーでした。ナタリー・ディヴィスなんて言ってました。たいへんな年寄りも杖をついて寄ってきました。クロードです。クロード・ズロースかな、いや違った。クロード・レヴィ＝ストロースでした。皆は語り上手で、南き上手がいなかったせいか、わいわいガヤガヤと、話の内容が南きとりにくいのです。ひとつだけ、はっきりと分ったことは、わたしに、魚を分けろ、と、脅すのです。わたしは断わりました。



皆はブツブツ言いながら、大根を置いたまどこかに消えてしまいました。こまったのわたしです。魚の分配を断ったのはいいのですが、どうも気持ちがふわふわと落ち着かなくて、仕事もできなくなったのです。こんなときにはネーシに頼んでもらうのが一番です。明るくなってから、ミタブラのバアの元に行こうと決めました。島ではなんでもネーシなのです。ネーシとは女の神役で、お祓い、祈祷をして、わたしたちを護ってくれる人です。

話の続きは会場でゆっくりいたします。

第二回「ナオの南風（はえ）語り」

五月二三日　午後三時

於ギャラリー・ガラ（小田急線梅ヶ丘）

題「地図から消えた日琉境界の島　―臥蛇島の互助力―」

社告

カゴ屋のひとりごと

江戸を後にした坊主が野中を進むうちに道に迷い途方に暮れていると、一人の草刈り男に出会った。坊主が親しげに近寄って道を尋ねると、何を思った、男は背を向けて鎌を持ち直し坊主にこう告げた。「坊さん、有り金置いていきな」

坊主は構えもないままに手持ちの十両を相手に差し出す。男は銭を懐に入れると道を教えてくれた。坊主は逃げるようにして先を急ぐ。しかし何もしないうちに、意を決して踵を返してさっきの男の元へ戻った。

「お若い衆、済まなかった。実は懐にはもう十両隠し持っていた。これも置いていくから」

男はさっきとは打って変ってボロボロと涙を流すのだった。差し出された金を受け取るどころか、その場にしゃがみこむ。

「どうか俺をあんたの弟子にしてくれ」

坊主はなぜ踵を返したか。自分のしたことが後ろめたく、改めたかったのか。そうだとしたら、相手の男にもいえることである。坊主は隠していた十両を差し出すことで、やり直しがきくと期待したのだろう。これは目の前にそらつく破れ障子の張り替えと思いついたようなものだ。同じような考えから、生涯を賭けて張り替えに忙しくするなら、新しい発見も進展もみられないだろう。イッワリはイッワリでいいではないか。誠実は気休めの中にはなく、イッワリを振り捨てていくことのほうにある。

破れカゴの修理

だいたい以上のような内容の一文を読んだ。萩原延壽の『書書周游』のなかに引用されている石川淳の書いたものである。破れ障子の張り替えと破れカゴの繕いとどう違うのか、気になった。底が抜け、段ボールのはれ端でも詰めておかないと、入れたものが落ちしまうカゴなど、棄てておくべきである。手直しに同じ手間がかかるならば、新しく編んだほうが美しくもあり、丈夫でもある。そこまで分かっていても、わたしは繕い仕事に手が出てしまう。

実は、カゴ屋には人には明かせない悦楽があった。カゴは布と同じで、タテの骨とそれに直角に編まれている回しヒゴとでできている。タテとヨコの竹が厚すぎると、交差して重なる部分の竹がケニカとして折れてしまう。薄すぎると破れる。カゴ屋の腕の見せどころである。

その技をもって破れカゴを目にすると、作り手の腕が分かる。古くなって油っ気が抜けた竹は折れやすい。新しい本を差しこんで破れを直して

↙(次頁)

こりない、こりない、悔い改めない新聞

いると、古い竹が折れたまま、タテ骨の陰に隠れていたりする。使い手が、何とかして繕おうとした工夫の跡である。

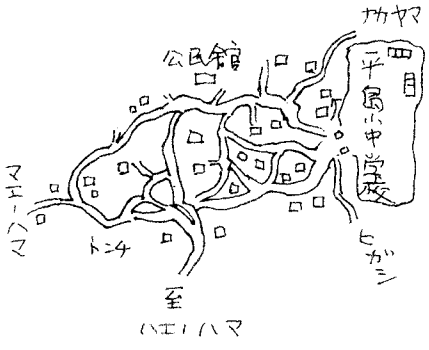
日本では、北海道と沖縄を除いて、平地での茅葺き屋根の下地には竹が使われている。その竹に、イロリやカマドから立ち上る油煙が染みていき、百年もすると美しい飴色の煤竹になる。それを現代のカゴ屋がありがたがって使っている。

茅屋根葺きはクミウチ(組中)の共同作業であるから、ひとりひとりがナタを持参して竹山に入っていく。鍛冶屋で打ってもらった自慢のナタを振る者は切り口が鮮やかである。あまり力ガネが良くないと、その逆になる。こまめに砥石をかけていれば、見分けのする人がネでも大差なく切れる。どんなに自慢のナタでも、作業の前日に深酒をして、刃物の点検もロクロクせずに、寝ぼけ眼でヤマへ入った者は腕力に頼って竹を倒すしかない。そうなると、一刀両断にはほど遠く、同じ箇所に二回、三回とナタを入れるから、しまいにはノコギリの歯のような、ひきちぎったような切り口になってしまう。

それらの竹が歳月をかけて煤を吸いこむ。竹の表皮の飴色の光沢とは別に、切り口は極上の墨で掃いたような艶炎が浮き出てくる。実際に書道家は煤を固めて作った墨を最上のものとしていると聞く。だから、社主は切り口のある竹の根元を捨てないで、何とか作品の中に活かそうと試みる。

破れカゴを繕うのは、破れ障子の張り替えとは違う。煤竹の根元の切り口から多くの物語を読み取ることができるのと同じで、破れカゴも多くを語っている。修理仕事は、先人の手形を飲みこむことから始めないと、先に進めない。用に耐えるカゴに張替えするには、気休めではすまない。

繕ったカゴはもはや最初の新人のものではない。後世のカゴ屋との合作といえいほどに、新しい工夫や癖が織りこまれている。見も知らない大先輩のカゴ屋とハモったときは、まさに悦楽の極である。

△ △ △ △ △ △

ダイコンが死んだ現場
→ 印で示す